「日本文化の源泉としての磐座・磐境（八）」

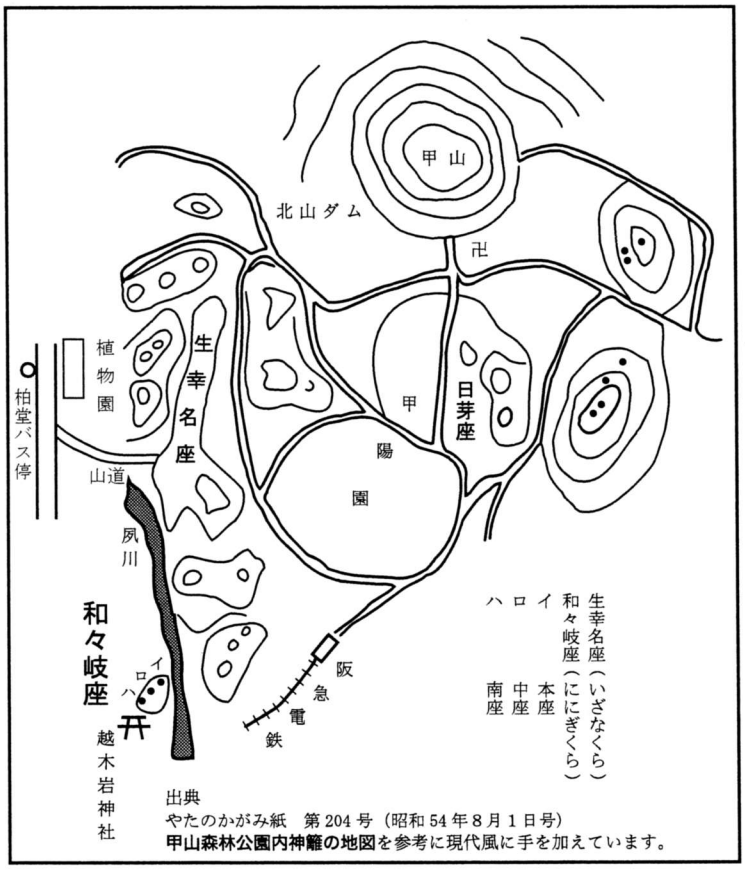
甲山とその森林公園の磐座

ＮＰＯ古代遺跡研究所 所長　中島 和子

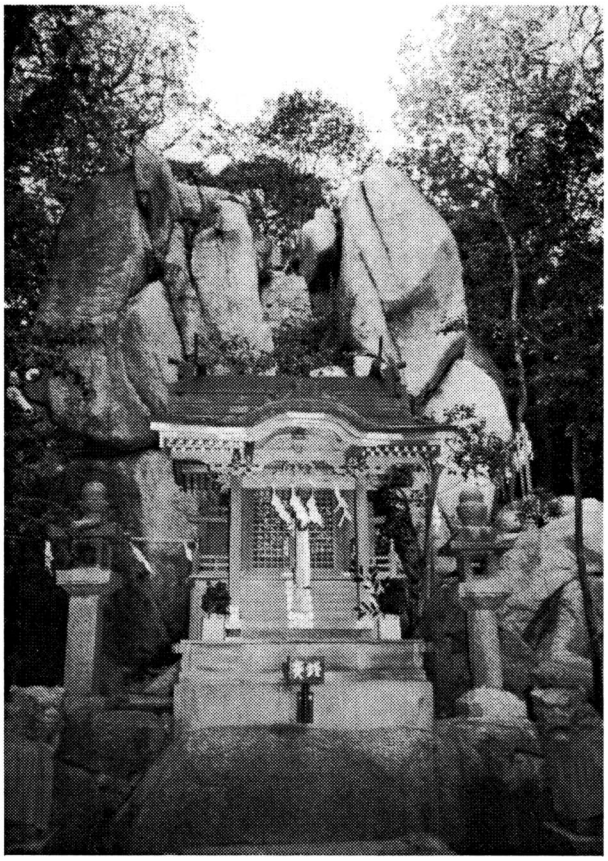
和和岐座（越木岩神社）

甲山山麓の南南西に位置する北山ダム、その西側に南北に長く横たわる丘陵は生幸名座（いざなくら）と言って、生幸名岐・生幸名美命の磐座を軸としてその皇子（みこ）である天照皇（すめ）大神、須佐之男命（すさのをのみこと）、月読命の三貴神の三つの磐座が古事記の記述の通りの位置に配置されているのを前回紹介した。また生幸名座の中央の道を南下して柏堂（かやんどう）のバス停から東へ伸びる山道との交差点まで来ると、一段と高くなり、砦のような巨石群があり、そこには天孫降臨を示す岩組みが揃っている。なかでも天孫和和岐命（ににぎのみこと）を象徴したと思われる巨石は特別大きく貫禄があるので、これまでにも幾人かの研究者がその後姿をみて太陽石として紹介しているが、神籬全体の構想から見直し古事記の記述を参照すれば、その誤りは自ら明らかとなろう。

さて、生幸名座の先はどうなるのだろうか。太田二三氏の残した地図によると[註①]、生幸名座の南端の先には「和和岐座」が描かれ、小さいながらも北から本座、中座、南座と三組みの磐座が存在したことが伺える。昔はこの辺一帯は人里から離れた甲山山麓の山上に位置していたと思われるが、今は周囲に住宅や学校がびっしりと建て込み、単に坂の上の神社なる感である。現在、上記の地図の南座の前には越木岩（こしきいわ）神社が建っている。その鳥居をくぐり神社の正面から北上しながら磐座を探すと、まず出交わすのは、神社の真後ろにある巨石である。その高さ十米は、六甲山の三国岩の岩門や剣岩の高さを越えるものではないが、周囲が



第一図　生幸名座と和々岐座

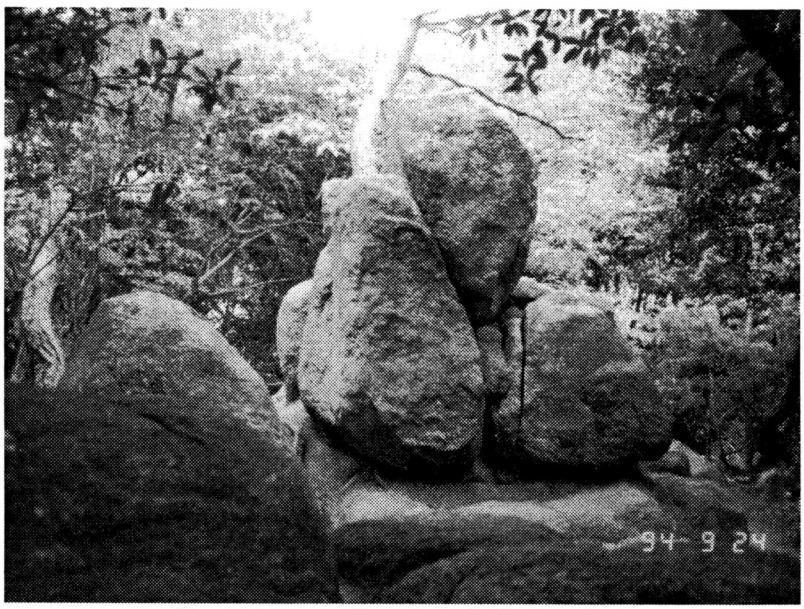


第二図　和々岐座の岩門正面の祠

三十米もある。神社はその巨大さを尊び「霊岩こしき岩」と称して前面に祠を建てて神仕えをしている。由緒書きによると、大坂城築城の折りにこれを切り出そうとしたところ忽ち岩中より鶏鳴し白煙立ち上り、その霊気に打たれて石工たちは転げ落ちたとのことである。その巨大さは人々に畏敬の念を起こさせるためか神社参拝の後ここまで足を延ばす人は多い。しかしこの巨石は、神籬全体の構造からみると辺津（へつ）であり南座であり、機能的には、岩門（いわと）である。

その岩門の背後に続く鬱蒼たる林の中の小道を登ってゆくと、やがて左手に翼を広げたような二群れの岩組みが姿を現す。その先は風雨に曝され落ち葉の積る原野となる。その頂上に最も尊き磐座が、ひっそりと佇む。一六〇センチ四方の礎石の上に組まれた七個の岩は人型のように見える。荒深翁によると、正面中央に一段と高く組まれた岩は天照皇大御神で、その周囲を五柱の皇子（みこ）を象徴する五個の岩と三皇女（ひめ）を象徴する一つの岩が取り巻く。すなわち正面左には第一皇子・忍穂根耳（おしほねみみ）の命（みこと）、右には第二皇子・天之穂日（あめのほひ）の命（みこと）の岩が並び立つ。さらにこの岩組みの前方に、翼のように左右に広がる二つの岩群れは、先ほど左手に見ながら登ってきたのであるが、天孫和和岐の命を象徴し、この奥座に古事記に書かれている三代にわたる天っ神が祀られていると言う。

ところで磐座は、木材による神社建築の始まるはるか以前に古代人が巨石をもって構築した自然・太陽崇拝の斎場であるが、木造の社殿が造られるようになると、人々はまず磐座の前に小さな社を置き幣殿とし、それはやがて山麓に下宮を建て、さらに時代を経て人々の便利主義が高まると、住居地の近くに里宮を建てることになった。その結果、現在10万社といわれる神社の大方は元宮（もとみや）である



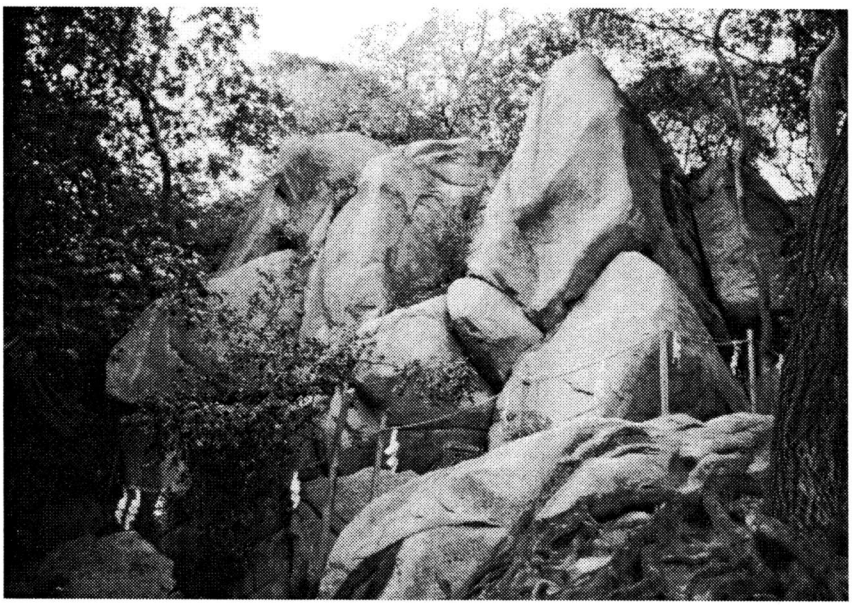
第三図　天っ神三代を象徴する本座
左端の岩は三皇女を表す

山上の磐座との繋がりが切れてしまった場合が多いが、越木岩神社は、その双方を境内にもつという点て稀有の存在である。

現在「こしき」は「越木」または「甑（こしき）」と書かれているがいずれも当て字で、磐座の建てられた大昔には、元の日本語で、「こ」は心で、「し」は霊（ひ）に通じて神、「き」は現れることを意味し、総じて「神の心の現れる」尊い斎場であった。また後世になって「こしき」は「児敷き」に通じるところから子孫繁栄の神社として広範な参詣者を集めていた。ところで、本座と南座（岩門）の間には中座があったことを地図は示している。そこには天孫降臨時のお伴神（ともがみ）を表す磐境があったということだが今はすべて失われている。また荒深翁によると、この岩門に降臨される神は、須佐之男命（すさのをのみこと）ということである。神社はこの巨石を米を蒸す蒸し器の形だと説明する。そこで改めて東南角から岩門の巨石を見直すと、蒸し器どころか、まず目につくのは岩門の足元に長々と横たわる大蛇（おろち）の姿である。さらにその上の石に目をやると、そこには馬のような牛のような長い動物の顔が見えるし、さらにその奥には獅子のような兎のような猿のような顔も見える。これは何としたことだろうか。

そこで巨大な岩門をもつ六甲山の三国岩を思い出し比較してみた。彼の地のご祭神も天照皇大御神である。しかし岩門に降臨される神は手力男命（たぢからをのみこと）である。同じご祭神なのに何故違うのだろう。手力男之命が天照皇大御神の第一のお伴神であることは、伊勢の皇大神宮の内宮にも示されている。

こしき岩の岩門にはなぜ手力男之命でなくて、須佐之男命が降臨されるか。それは、こしき岩の奥座には、天照皇大御神のみならず三代の天っ神が祀られていることに関係があるようである。



第四図　東南角から見た岩門

まず考えられることは、本座に祀られている第二代目の天っ神である五柱の皇子（みこ）と三柱の皇女（ひめ）は、天照皇大御神と須佐之男命の宇気比（うけび：誓い）の合力によって生み出された神々であるということである。従って生みの親神である須佐之男命を祀る磐座がここに存在する十分の理由がある。しかし分らないのは、その磐座に何故多数の動物の姿が表示されているのかである。

そこで、須佐之男命について詳しく知るために古事記を繙き、漢字を排除して、元の日本語でスサノオの意味を探ると、スとは生命の元（もと）、サは栄え殖やす。ノは延び広がる力、ヲは緒で、総じて「生命の素（もと）が幸（さち）栄える力」となる。

ところで須佐之男命のご任務はどのようなものだろうか。三貴神のご発祥と分治について古事記は次のように記述している

「この時伊邪那伎命大（いた）く歓喜して詔（の）りたまひし

『吾は子を生み生みて、生みの終（はて）に三はしらの貴き子を得つ』とのりたまひて、すなわち天照大御神には『高天原を知らせ』と、次に月読命に詔りたまわく『汝命は、夜の食国（おすくに）を知らせ』次に建速（たけはや）須佐之男命に詔りたまわく『汝命は海原（うみはら）を知らせ』と事依さしき」[註②]

ここで注意すべきは、古事記の編纂者が漢字を導入したことが、後世大きな誤解を残したことである。すなわちその任務「うみはら」を「海原」と当て字したことで、海を治める任務を負ったがごとく誤解されるようになったが元の日本語の意味によると「うみ」は「生み」で、「うみはら」は海原ではなく、「生み腹」である。それは、海ばかりでなく、万物を生み出すべき所すなわち地上の一切の生命を司ることで、須佐之男命はその名の意味からも「生命の素（もと）を生み幸（さ）ち栄える神」で、生物の進化発展を司る神の意である。

既に地上生命は、伊邪那伎命時代に火山活動によって四方へ蒔き散らされていた蛭子（ひるこ：バクテリア）がアメーバー細胞組織に進化していたが、次の穂之狭分命（ほのさわけのみこと）時代に蘇苔時代へ進化していた。それを更に草木時代へ進め（須佐之男命）次いで虫魚時代へ進め（速（はや）須佐之男命）次に鳥獣時代へ進める（建速（たけはや）須佐之男命）となるのである。

つまり天つ神三代の御世とは、地殻の大変動とその上に生きる生命の革新・造化・変化・発展を経過してやがて人間の誕生へ向かう長い長い進化の御世で、須佐之男命は、大国主命に世を譲られるまでの波瀾にとんだ至難の世を治められた神であった。その神業（かみわざ）を讃（たた）えて、進化途上にあった動物たちの姿をここに表示したと考えられるのである。

その眼で岩門を見直すと、その足元に長々と横たわる大蛇は、疑いもなく八俣（やまた）の大蛇（おろち）である。須佐之男命が大蛇を退治し、足名椎（あしなづち）、手名椎（てなづち）を助けられたことは、それまで繁栄していた爬虫類の時代に終焉を打ち、鳥獣時代への開幕を告げるものであるがこの物語は古典にあまりにも有名である。

ところで岩門に顔が見える大蛇以外の動物について古典はどのように記述しているであろうか。古事記では天上でのご乱行によって八百万の神々に追われ空腹のまま地上へ戻られた須佐之男命は大気津比売神（おおげつひめのかみ）から食物を与えられるが、その食物は大気津比売神の口や鼻や尻から取り出した物と知って怒り殺してしまう。しかし死した大気津比売神の体から多種の食物の種が生まれた。その頭に蚕、目に稲の種、耳に粟、鼻に小豆、陰に麦、尻に大豆・・・・と。ここでは蚕以外は植物である。これにたいして、日本書紀では少し違っていて、もともと須佐之男命は天照大御神の命をうけて保食神（うけもちのかみ）に会うため地上に降り立ち山海の馳走を受けられる。しかし口から取り出した食物であったため怒って殺してしまう。これを聞いた天照大御神は大層怒り、他の神を様子を見に遣わしたところ、死せる保食神の「頂（うなじ）から牛馬化（な）れり」、額の上に粟、眉の上に蚕、眼の中に稗、腹の中に稲、陰に麦、大豆、小豆が生まれた。と書かれている。[註③]

第五図　岩門の足元に横たわる八俣の大蛇

まとめ

和和岐座（越木岩神社の磐座斎場）は、この森林公園の磐座全体をひとつに集約し象徴した尊い斎場と考えられる。扇の要（かなめ）のような存在と思う。

私は、こしき岩の岩門の意味を探ることによって、磐座に籠められた構築者すなわち縄文古代人の深い思いを垣間見ることができた。物質文明の中で育ったわれわれ現代人は、磐座をみて、まずその大きさに心を打たれる。そしてその次にはこの巨石を山上までどのような方法で運んだかと運搬を気遣う。そしてどちらも現代人にはできないことと知りそこで初めて古代人にたいする認識を新たにする。大きさにしても運搬の方法にしてもどちらも極めて物質的表面的な見方である。それに対して、磐座が何を表示しているかというと、縄文人が磐座の磐を選ぶにあたっての配慮は、それがそこに降臨される神に相応しく聖なる磐であるか否かだけではなく、その神のご性格やご任務、業績（かみわざ）に相応しく形を整えているか否かでもあって、これを全う出来る者は、單に石工に勝れているのみならず相当に博学な者である。それに比べて、われわれ現代人は磐座の前に立ちながら何と、殆ど何も知らず気も付かず、感じもせず、哀れな人間であることよと情けない思いをする。しかし気づいたことは再出発の鍵となる。岩門について更なる観察を進めたいところであるが、残念ながらそれができない。岩門は、身の丈を越える大きな雑木で覆われていて人が近づくことさえできない。まるで雑草のなかに放置されているようだ。ただ一本の雑草さえ許さなかった縄文人と比べて、何という不精（ぶしょう）、何という無知、何という不敬であろうか。

ところで三回にわたって取り上げてきた甲山周辺の磐座群は、すべて甲山に向かって配置されている。一体甲山とは何であろうか。ただの自然の山なのだろうか。それとも人工の加わった山なのか。次回はこの問題に迫りたいと思う。

註

①太田二三の日記「在真御山座詣で」やたのかがみ紙　第２０４号（４）

②倉野憲司校註「古事記」岩波文庫31頁

③荒深道斉著、日立道根彦編「宇宙時代の科学的古事記正解」111頁

×　×　×　×

この論文は、兵庫県神社庁発行の季刊誌「兵庫神祇」第５７８号より抜粋

問い合わせ先
西宮市上ヶ原五番町３－２７
ＮＰＯ古代遺跡研究所
電　話　〇七九八－五一－七三三一
ＦＡＸ　〇七九八－五一－九五二〇